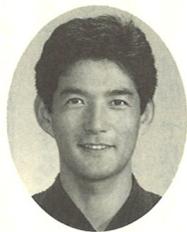


させている。詳しくは、勤務校の紀要に書いたの
でご覧いただきたい（福井県立藤島高校『研究集
録 第三十四号』）。

悲惨を経験した後には理性を働かせるのは、歴史
の中に無限に繰り返されてきた人類のクセであ
る。今なすべきことは、悲惨の前に理性を働かせ
ることだ。極端なものの方を疑う。そして矛盾
に満ちた「人間」の世界を愛し、バランスのとれ
た姿勢を取り戻そうということだ。

攻める・護る・逃げる・
感じる・読む・打つ
そして打たれる!!



丸岡高校

山本 英俊

*イメージ剣道 始め!!

今、面をつけて竹刀を持ち相手と構えている状
況を、イメージしてみてください。

剣道を全くやったことのない方でも、剣道のお
もしろさがわかっていただけたらうれしいです。

攻める!

攻防の一致という言葉があります。攻めるだけ
でもダメで、また護りっぱなしでも勝つことはで
きません。私がお世話になつて居る剣道では、一
瞬にして勝敗が決します。相手に対して恐れが
あつたり、一寸でも自分に迷いがあると即座に相
手に攻め込まれます。容赦はありません。立ち止
まらず即座に状況を判断して、相手に充分な状態
をつくらせないことです。試合の直前に面をつけ
るときには、既に心の中で相手を攻め込んでいま
す。相手の間合いに危険を顧みず、勇気を持って
グイグイ入り込みます。相手の機先を制するわけ
です。

護る!

当然、相手も先に攻めておきたいところです。
自分と相手の間合いには、双方の充分な気と気が
ぶつかり合っています。自分が打つて出るか、相
手が打つてくるのか緊迫した状態のなかで、相手
の方が自分より少しでも有利な状況があるとき、
一時負ける勝負を避け、相手の打ちをかわしたり、
相手の技を出しにくくしたりします。丁寧さも要
求されます。勝ちを急ぎすぎると相手の状況が見
えなくなつたり、感じなくなります。心のバラン

スを維持することです。

逃げる！

相手の充分な気合いに押され、気後れしている状況や、体勢が相手に対して絶対に不利な状況の時には、あつさり間合いを切り、相手の打突を有効なものにならないよう、卑怯にも逃げます。相手の充分な気をそぎ、次ぎの機会をつくり直すわけです。当然、明らかに攻めない状況が度重なる場合は、ルール上反則行為となります。また、虚をつくという状況にもなり得ます。間を切ると見せたり、体をさばくと見せたりして、相手の一瞬の心のスキをつくわけです。

感じる！

気迫の強さは攻めの強さとなりますが、時には反面強引になり過ぎて、自滅することがあります。自分の得意な技を多用したり、相手との状況を察知しないまま打ちに出たりすることで、相手に逆手に取られて打ち返されたり、自分が精神的にも肉体的にも疲労して、停滞したところを打たれてしまいます。よって、自分の状態だけにとらわれずに、相手が今打ちに出ようと焦っているのか、弱気になって逃げようとしているのか、そうと見せかけてこちらが焦って打ちに出るのを待ち構えているのかなど、探りを入れながら敏感に感覚で感じる事が大切です。

読む！

過去の経験からという、かなり昔からというわけではありません。試合中のちよつと少し前の状況からといった場面も含めて、相手の攻め方や打つときの癖・スピード、または護り方などを単純にインプットします。つぎにこちらが打ちに出たときにどういった反応をするのか、どんな技で応戦してくるのかを確かむことができたなら、それらを相手の弱点として捕らえます。相手の勝負どころでもある場面を、あえて逆手にとるわけです。「よし、この策で打とう」と思っても、チャンスが来るまで我慢します。ここぞという時に使うわけです。相手に読み返されてはいけません。

打つ！

攻めて打つ。護りながら打つ。逃げながら打つ。感じながら打つ。読みながら打つ。勝負には、手を打つ執念が必要です。どんな状況でも、決める勇氣と決断力が必要です。そして折角、攻めていても、護っていても、感じていても、読んでいても決定打となる完成度の高い打ちが求められます。大きく・早く・強く・冴えのある打ちです。打つた時、竹の弾力性からくるビリビリとした衝撃が体中にしびれます。緊迫した相手との創作活動の結実の瞬間です。

打たれる！

攻めないから・ガードが弱いから・逃げ続けたから・強引過ぎたから・相手の技を読まないからなど、打たれる要素は様々です。打たれると悔しいものです。日本刀なら死んでます。でもそこに、ヒントがあるわけです。気づくことが大切です。打たれる＝自分の弱点を知ることです。そして工夫して訓練して、自らの変化を自覚できたと克服していく楽しさを味わうことができるでしょう。

* イメージ剣道 そこまで!!

さて日常の家庭や学校で、攻めがなく、護りっぱなしで、場面によっては逃げてしまい、感じてはいるつもりだが心配りができず、先回りする余裕もなく、決める勇氣と決断力も鈍り、読まれっぱなしで打たれっぱなしといった具合で、氣を奮つていざ勝負と剣道のように上手くいくわけはないのですが。打たれるヒントを探り、自らを磨く手を緩めずに、生徒や先生方また家族と愛情たっぷり、これからの創作活動を楽しみたいと思います。



学生時代

不惑の年



丸岡高校

岩永 純

1. ジェネレーション・ギャップ

私の職場には自分も含め、同級生が六人いる。世の中がバブル景気に浮かれていた頃に大量採用され、教員になった面々だ。そんなバブル教員も気がつけば四十才。知らないうちに人生の折り返し地点を通り過ぎてしまったようである。精神年齢はせいぜい二十七才くらいだと思っているのに、仕事の上では立派な中堅とみなされる。そんな内と外とのギャップに苦笑いするしかない私なのだ。

最近二十代の先生方と話すと、考え方がとてもしっかりしているなあと感じる。自分が同じ年代の頃にはもったいい加減だったのではなかるうか。採用が多かった世代の私と、難関をくぐり抜